



<はじめに>

45 年ぶりに沖縄を訪ねた。あるテレビ番組を見ていたら「青年は未来に生き、老人は回想に生きる」という言葉が出てきた。この時「歳をとると童に帰る」という似通った言葉が頭に浮かんだ。まだ、そこまで大げさになることはない。しかし、過去の記憶に戻って見たくなることも多くなってきた。その一つに学生時代に旅した地、特に遠方にもう一度、今の間に行って見たくなったことがある。時間にゆとりができた昨年から動き始めた。とはいっても、学生時代と同様、今は時間的な余裕があるとはいえ、お金はそういう状況でない。年金をもらう歳になってそのことを実感している。昔は「遠い町」の基準は距離であった。しかし、最近は交通運賃が基準になっている。格安飛行機を使えば距離が遠くでも実に近い町となった。今はビーチが救いの手を差し伸べてくれている。

飛行機は随分早いもので、関空を朝 8 時に発つと、10 時半には那覇に着いてしまった。まずは、45 年前の沖縄海洋博の時に訪れた美ら海水族館に行った。当時の記憶では大きなパビリオン（アクアポリス）があった。未来の海上都市をイメージした構造物で、海洋博のシンボルとしてメイン会場ともなったところだ。聞くと 27 年前に閉館し、その後、鉄屑としてアメリカ合衆国の企業へ売却処分、解体場所の中国の上海へ海上を曳航されたとのこと。



美ら海水族館は今も人気があるのか、非常に多くの方が来ていた。沖縄は日本の他県では見られないサンゴ礁の海が広がっている。私はこの海を再現した水槽（沖縄の強烈な日差しを直接取り込む方式）が非常に印象に残った。

<慶良間マブルーの世界>（慶良間諸島国立公園）



当日の慶良間の海（座間味島）

翌日はケラマブルーを求めてサンゴの海、座間味島を訪ねた（上の写真）。あいにく空は雨雲、小雨が降り続く。ケラマブルーってどんな色か皆さんご存知だろうか？そういう私も、こういう色だとの説明はできないが……。この島周囲の海の色を表現しているようだ……。

少し海の色についてご説明しよう。どこの海でも、季節、場所、天候、時間等によって多様な色が現れるが、南国の



晴天時のサンゴの海（ニューカレドニア）

海には共通した独特の色が現れる。その中心の色はターコイズブルー ■■■ 系だ。南の海の大きな特徴はサンゴが生息してサンゴ礁が発達していること。サンゴは死ぬとその殻は白化して白くなる。それが波で細かく砕けて海岸に打ち寄せられて真っ白な砂浜になる。波打ち際の海色はこの砂の色が反映されて白っぽく見える。一方、沖は水深があるため、太陽光の中の赤系の光が吸収されて届かないものの、青系の光が海深くまで到達するために真青の海、いわゆるコバルトブルー ■■■ の色となる。海は岸から徐々に深くなるのが一般的であるために真っ白の海底とそこの海の深さに応じて、いわゆる白～青とその混合色を含めたターコイズブルーからコバルトブルー系のバリエーションに富んだ色の海が現れる。コバルトブルーの海は関西でも普通に見られるが、ターコイズブルーの海はまず見られないのはこのためである。観光パンフレットにはエメラルドグリーン ■■■ の海とよく書かれているが、私はこの海色をプランクトンが少なく透明度の高い南の海ではあまり見たことがない。しかし、湖水等ではよく現れる色である。間違っているかも知れない。少し長ったらしい説明をしてしまったが、以上が一般的なサンゴ礁の海色である。南の海にもそれぞれの個性がある。ここ慶良間諸島は頭に地名を付けてそれをケラマブルーと呼んでいる。

座間味島の写真をお示ししたが当日は天気不良でその色は見られなかった。太陽が十分に当たると深場

は青くなり、砂浜付近の浅場はターコイズブルーがもっと強く出るはず。なお、撮影時の写真の下に別な場所で好天時に撮ったサンゴ礁由来の海岸の写真をお見せしましょう。

ところで、モネやルノワールは有名な印象派の画家たちだが、彼らが追及したのはまさに光と色の芸術だったのだ。光が幾通りもの色を表現することはこの目で体験している。そこで、目に入るあらゆる色の世界を絵の中に描くことに熱中したと……。光による多様な色の表現は海だけではなく、ありとあらゆるものに通じるのでしょうね。写真を撮る目的で被写体を追っているとその感覚がとても理解できる。

後になったが、ここで慶良間諸島にもちょっと触れておこう。座間味島は、那覇市の西方約 40 km の慶良間諸島の中央北側に位置する。那覇泊港から高速船で 50 分。この島の古座間味ビーチや阿真ビーチなど美しい海を求めて、国内外から多くの観光客がこの島を訪れる。太平洋戦争の沖縄戦ではアメリカ軍が最初に上陸した島となるなど、激戦地の一つとなった。2014 年に慶良間諸島国立公園に指定されている。

マリンスポーツが盛んでシーズンは若者が多く訪れるらしい。その他、ホエールウォッチングもできる。とにかく那覇から近いのがおすすめ。ほぼ 9 割が観光の島である。今回は 1 月というシーズンオフの平日のためか観光客は皆無であった。海をゆっくり観察しようと普通船で訪れた。那覇泊港を 10 時に出た船は途中阿嘉港に寄港し、約 2 時間で座間味港に着いた。島人口は 597 人、戸数は 358 戸（2019 年 4 月）。

海沿いでは南国でしか見られないアダン（右写真）の木が印象に残った。大きなパイナップル様の実がたくさんあった。本土の松のように防風林の役目をするとか。村中は民宿が実に多い。貸自転車、バイク店も多い。これで島一周は快適だろう。ウエットスーツや足ヒレなどのスキューバダイビングの道具が至る所の民宿に置いてあるのを見受けた。漁協直営の天ぷら屋さんに入った。イカ、シイラ、カジキ天を食った。うまかった。魚は主にマグロ類を獲っているようだ。船内の自動販売機は 1 月厳冬期でありながら、冷たいもの中心だった。さすが沖縄ですね。

<ゆいレールと那覇の町>

空港から那覇の町の中心部までモノレールで 20 分程度。空港からこんな近い県都は他にない。至極便利である。ところで、日本ではモノレールは鉄道に分類されるらしい。私は目下、JR 全線、普通列車による乗車を目指しており、既に 90% に乗車した。JR 以外にも特徴的な路線があれば乗車している。沖縄県は日本で唯一 JR が走っていないが、モノレールは日本で最も南にある鉄道として興味があった。「那覇空港駅」が日本最西端の駅であり、次の「赤嶺駅」が日本最南端の駅になる。このモノレールは渋滞の多い那覇の切



り札として 2003 年に登場した。正式名は沖縄都市モノレールという。那覇市の「那覇空港駅」と浦添市の「てだこ浦西駅」間 17km を約 40 分で結んでいる。愛称は「ゆいレール」。沖縄の方言で『助け合い』を意味する『ゆいまーる』にちなんで名づけられた。モノレールを県民みんなで支えていき、モノレールが地域を結び、人と人とを結ぶという意味が込められているそうだ。2020 年現在で沖縄県内に現存している唯一の鉄道路線である。



モノレールは高い所を走るので町が見渡せる。知らない町で乗るとその町のイメージがつかめるので有難い。沿線には那覇市の中心的な町並みがある。これに乗れば那覇の町の背骨が見えるような気がする。当初、経営が成り立つのか心配されたそうだが乗り越し苦労に終わったようだ。首里駅近くになると、町が台地上になっていることがわかる。この台地は琉球石灰岩、つまりサンゴ礁の上にできたようだ。遥か昔は海の中のサンゴ礁だったのか。それにしても那覇の町は穏やかな雰囲気ですてきに美しい。那覇空港発着の航空機の安全な航行を目的としてビルは高さが制限されており、その分遠くまで見渡せる。それがかえって美しい町をつくっている。また各ビル屋上には湯水用であろうか貯水タンクがあったし、関西では見られない屋根が付いた家のような墓も見られた。滞在中はすべてこのモノレールを使って那覇の町を散策した。

那覇市は人口 31.9 万人余を有する県都。また首里台地（標高 165m）から東シナ海に面して、ゆるやかに傾斜した平野部を背景に、古くから港が整備されるなど、海外との交流拠点として、「琉球王国」文化が華ひらいた町。19 世紀に入ってから西洋諸国の異国船が来航し、日本開国の前年の 1853 年にはペリー提督が那覇

に上陸したそうだ。太平洋戦争末期の 1944 年 10 月 10 日の大空襲で市域の 90%を焼失、さらに引き続く沖縄戦によって完全な焦土となり、多年にわたって築いたまちは灰塵に帰した。1972 年（昭和 47 年）5 月 15 日、多年の要求であった祖国復帰が実現し、日本国憲法が適用される中で、都市基盤が一層整備され、近代都市となっている。

気候は年平均気温 22℃、平均湿度が 77%で、春秋の季節の特徴は、はっきりしていない。連日、気温 30 度前後の蒸し暑く長い夏と気温 16～17℃の暖かく短い冬に分けられる。春から夏にかけては雨量が比較的多く、夏から秋には熱帯低気圧の通過路となって、毎年数個の台風が来襲する。（那覇市 HP より）

<栄町市場を歩く>



那覇市の安里というところに「栄町市場」というレトロな市場（庶民が日常に使う）がある。市場是那覇市に限らず昔はどこでもたくさんあった。しかし、那覇市でも現在残っているものは、第一牧志公設市場と栄町市場の 2 つだけらしい。前者は超有名な国際通り近くにあるため、客の多くが観光客である。しかし栄町市場の客層は、いまだ地元住民であることが特徴的だ。この市場があるところには第二次世界大戦に「ひめゆり学徒隊」として動員されたことで有名な県立高等女学校と師範学校女子部とその同窓会館があった

そうだ。戦争によりこの地は焼け野原となったが、戦争直後ここに自分の土地があっても入れない人々がどっと押し寄せてきた。そうして人が集まり、ここで闇市を始めた。このようにして 1949 年（昭和 24 年）、栄町市場が誕生した。国際通りから徒歩約 15 分、モノレール安里駅から徒歩 5 分ほどの距離にある。この市場については関西方面でもテレビなどで時たま紹介されており、私も頭の片隅に記憶があったので、一度覗いてみようとなった。インターネットで検索するとほとんどが観光客を対象としたものであるが、実に多くの紹介ページが出てくる。そのページの頭文を見ると、「夜になるとノスタルジー漂うリトルアジアと化す」「那覇のディープでノスタルジックな飲み屋街」「ちょっと怪しげな飲み屋街、栄町市場へ」「昭和の雰囲気色濃く残す飲み屋街」「イメージとしては新宿ゴールデン街に近いといえるだろう」などなど、お酒好き、それも高級料亭ではなく庶民派、立飲み派には行ってみたくなるような誘い言葉がたくさん目についた。

今回は時間の都合で夕方に掛けてみた。夜は飲み屋街へと変貌するとのことだが、たしかに、この時間は市場だ。青果精肉店・豆腐店・洋裁店などに買い物に来ている地元のおっちゃん、おばちゃんが目立った。しかし、ポツポツと飲み屋さんもお店を開けているし、お客さんも見かけた。たしかに、ここはそれぞれのお店だけでなく市場全体がレトロであり、他の町で見られるレトロ感とは格が違うような印象を持った。



<金城石畳道と琉球石灰岩>

首里城跡（世界遺産）近くに石畳道があるというので行ってみた。そこは 14～19 世紀にかけて栄えた琉球王朝時代の城下町である金城町（那覇市金城町）にある。長さ 300m あり、琉球石灰岩が敷かれた石畳道で首里城から続いている。琉球王朝の尚真王の時代（1477～1526）に首里城から南部へ行く道として造られたそう。

敷石（右写真）は大小の琉球石灰岩を組み合わせたもので、石の表面は年季が入っているのか摩耗しているように見えた。その両側には「あいかた積み」とよばれる手法を用いた石垣塀があり、その奥には赤瓦屋根の屋敷が見られるなど、なかなか絵になる小道であり、城下町の風情を残していると感じた。NHK ドラマ「ちゅらさん」の撮影地になり、沿道の民家が主人公の自宅外観として使われたそう。

ところで、ここの土地はサンゴの増殖によってできたサンゴ礁が土台になっている。サンゴ礁とは海にあるものだと思っていたが過去の地質活動で、このサンゴ礁が隆起して今の様になった。これは驚きだ。沖縄に鍾乳洞も多いのもこの地質によるものだ。この地層を一般に琉球石灰岩層と呼んでいる。沖縄県土の実に三分の一がこの石灰岩からできたものらしい。

琉球石灰岩は、沖縄県では古くから建材として用いられ、道の石畳や家々を取り囲む石垣などを作るのに使われてきたほか、首里城などのグスクや墳墓もこの石で作られている。現在も石垣やお墓などの建材として使われている。また、赤瓦の美しい屋根にこの瓦をつなぎとめるために用いる白い漆喰もサンゴ礁を焼いて作った消石灰が利用されていた。琉球石灰岩はまさにその元になるサンゴ礁の段階から、沖縄の歴史や文化、生活に密接な関係を持っていたことが伺える。



<身近なところに感じる那覇町並みの印象>



那覇の街中を歩くなかでコンクリート造の戸建て住宅が実に多いことに気づいた。また、街路樹やお家の庭先の草花や植栽木も見ることがないものばかりであった。当然と言えばそうなのだが、見ていて実に新鮮であるし、面白い。そのあたりの観察したことについて幾つか紹介しよう。

その1 ～コンクリート住宅が目立つ町～

太平洋戦争の沖縄戦で那覇の町はほとんど消失してしまった。その後にアメリカによって 2×4（ツーバイフォー米国輸入工法）による「規格住宅」が提供された。しかし、本土とは比べ物にならない強烈な台風と沖縄特有の湿気が多い気候によるシロアリの被害など、建物の強度や住み心地に不安があったらしい。それに対して、コンクリートブロックで作られた米軍家族向け住宅は、台風の被害がほとんどなかったことから、木造住宅からコンクリートブロック（CB）や鉄筋コンクリート（RC）住宅へと移行していったらしい。

その2 ～屋根瓦～

住宅についてもう一つ気づいたことがある。それは住宅の赤い屋根瓦とそれが風で跳ばされないように真っ白な漆喰が塗られていることだ。そして、そこにシーサーが乗っている……。白の漆喰と赤い屋根の組み合わせはすごく見栄えがよく見事である。これも南国のイメージを定着させているようだ。山陰で見た赤瓦（石州瓦）は緑の山に映えていたし、ヨーロッパの古い町の屋根も赤が多い。赤い瓦は魅力的な景色を作るので私は大好きだ。



この瓦はどうして赤いのだろうか。沖縄の「赤瓦」は沖縄南部一帯で取れる地域特有の『クチャ』という黒色の泥岩を使って作っているそうだ。鉄分を多く含んでおり、酸化焼成という方法で焼き上げると鮮やかな赤い瓦が生まれるそうだ。また、ここの赤瓦は美しいだけではない。石州瓦と違って素焼きなので適度な吸水性がある。スコールなど急な雨が降った際にその水分を吸い、また、晴れて気温が上がると水分を蒸発させることで熱を逃がしてくれるので屋根裏の温度が下がり、室内を涼しくするらしい。いわゆる機能の面でも沖縄の暮らしを支えてきたとのこと。また、前述したように、この漆喰も沖縄のサンゴ礁起源だそうで、その気候風土から生まれた仕掛けには驚くばかりである。

その3 街路樹



驚いたことに街路樹が紅葉して落葉していた。側道に落葉した大きな葉っぱがいっぱい積もっている。南国では冬季に紅葉して落葉する木は無いと思っていた。まさか照葉樹林帯の沖縄で紅葉を見えるとは思わなかった。植物図鑑を見るとモモタマナという木であるようだ。シクンシ科の落葉高木。沖縄本島以南の海岸沿いに自生し、世界の亜熱帯でよく見られる木。夏は長さ 30 cm にもなる大きな葉をつけ木陰を作るので街路樹、公園樹としてもよく利用されている。

金城石畳を歩いていると道を塞ぐように根っ子が垂れ下がっている木に出会った。それは、ガジュマルであった。ガジュマルは亜～熱帯地方に分布し、日本では九州の屋久島と種子島以南に自生するクワ科イチジク属の常緑高木。沖縄県内の学校の敷地内には必ずと言っていいほど植栽されているらしい。沖縄では昔か

ら木の妖精・キジムナーが棲んでいるという言い伝えがあるとのこと。ジャングルジムのような枝が子ども達の遊具になり、県内で最も親しまれ沖縄をイメージさせる木として全国的にも有名な樹木だ。ガジュマルを最も特徴づけているのが、枝から多数垂れ下がった気根だ。気根が地面に達するとそこから幹を支え、多数の気根が集まると太い幹のようになって複雑な樹形を形成する。

タコノキという面白い木もある。気根がたくさん出てくる風貌はタコによく似ている。こんなものが街路樹になっているとは驚きである。パイナップルのような実がたくさんできて旨そうだ。歩く人に盗られないのだろうか、気になったがその心配は無用。旨くないらしい。タコノキによく似たアダン（パナマ帽子の材料）、フクギ、モクマオウ、リュウキュウマツ、アコウ、花ではランタナ、ブーゲンビリア、ハイビスカス、黄色のアリアケカズラを見かけた。観光者は海に目が行きがちであるが、大阪では見られない植物に会うのも楽しいことだ。



<最後に>

右表は択捉、国後島を除いた日本にある島（北海道、本州、四国、九州は除く）の大きさランキングを示したものだ。沖縄本島が最も大きい。この島の大きさを 1 とした場合の各島の値は右表のようになる。また、人口密度は沖縄本島が断トツの 1 位である。沖縄に最も近く琉球文化が混ざっていると

順位	島名	面積(km ²)	沖縄本島に対する面積比	人口	人口密度
1	沖縄本島(沖縄県)	1,206	1	1,282,000	1063
2	佐渡島(新潟県)	855	0.71	58,000	68
3	奄美大島(鹿児島県)	712	0.59	65,000	91
4	対馬島(長崎県)	696	0.58	31,000	45
5	淡路島(兵庫県)	593	0.49	134,000	226
6	天草下島(熊本県)	575	0.48	68,000	118
7	屋久島(鹿児島県)	504	0.42	13,000	26
8	種子島(鹿児島県)	444	0.37	29,000	65
9	福江島(長崎県)	326	0.27	38,000	116

いわれる奄美大島の 11 倍である。また人口が多い関西圏にある淡路島の 5 倍の人口密度である。かつては中国、朝鮮、東南アジア諸国、日本との中継貿易の拠点として栄えたことが知れているが、今に至ってもこれだけ多くの人がこの島に住むには何らかの理由があるはずだ。それは何なんだろうか、この島にはどんな魅力があるのだろうか、そんなことを考えながらもう一度ゆっくりと行きたい島である。

<参考資料>

・栄町市場の民俗誌

麻生有妃

・石材と人間の民族的・歴史的関わり

沖縄県立博物館紀要第 25 号 53-67 1999

※この旅の期間は新型コロナウイルスが中国で発生し始めた時で、まだ他人事でした。それが、我々にとってこれまでに大きな脅威になるとは想像もできませんでした。ほんとに恐ろしいことです。